町民文芸

只見短歌会　二月詠草

大塚栄一　指導

太き枝も裂けたる琵琶の雪払ひ夫は囲ひの安易さを言ふ　古川　英子

豪雪のなかを早くも渡り鳥群れ来て下げ置く凍餅荒す　渡部ゆき子

鹿児島の新燃岳の噴火では再度避難の老の身思ふ　吉津　政枝

高齢者多き集落に救急車今日も骨折の老を乗せ行く　馬場　八智

雪まつり施設の人に付添はれ巡る会場賑はひてをり　五十嵐英子

大雪に六地蔵尊埋もれしを新聞配りの片手で拝む　五十嵐夏美

会場に世界蘭展の花見れば知人の如く皆が頷く　目黒　富子

亡き義母の手順のままに寒飴を作りて予約の客を持て成す　皆川　恒子

この春は還暦とわが言はれしも実感できず時早く過ぐ　渡部ヨリ子

退院後手摺をたより階段を上る夫のあと娘付きゆく　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　三月例会

目黒十一　指導

雪の壁抉り灯せり絵蠟燭　礼

雛段の裾の木目込み鐘馗様　リウコ

荒れし風春一番と変わりし夜

谷川の岩に砕ける雪解水　笑　羊

軒下より飛び出す朝の寒雀　修　一

スコップを仕舞うや吹けり春一番　邦　男

余震なほ今宵ゆかしい春の月

鎮まりし地割れの道へ春の雨　康　女

人を待つ椅子の並びや冴返る

水口の神の祠や蕗の薹　吉　児

ボタン一ツ付けて居座わる春炬燵

よく遊ぶ子等よく笑い日脚伸ぶ　洋　子

金色に霾る雪野かがやけり

昧爽や一村つつむ雪ねぶり　恒　夫

水美味しく声弾みくる春日和

氷りつく星からからと飛び行けり　一　穂

春寒やサインポールの灯ゆるる

震度九東日本春の凍　隆　堂

受験日やこっそり供ふ洗米

商品は干支の置物春兆す　敦　子

山明けて肌黒々と雪崩跡

春眠やノートパソコン半開き　邦　夫

朱の色の鐘撞堂や寒明くる

橇あそび社の坂をすべり降り

おとなしく降れり夜明けの春の雨

老体のペースに適う春の雪